

私はこんな風に使っています！石灰窒素

石灰窒素は誕生して百有余年、永年にわたり沢山の方々にご愛顧いただいておりますが、時が移り行くなかで石灰窒素の効能や効果的な使い方が忘れられてきているように思われます。そのなかで読者の皆さまから「石灰窒素の使用事例を知りたい」などのご意見が多数寄せられました。

弊会では、多くの使用事例を紹介するため、会員各社から取材の協力を得ながら最近の使用事例と、これまで発行した『石灰窒素だより』の記事から過去の使用事例を紹介することで要望に応えたいと考え、本コーナーを設けました。どうか一読いただき、石灰窒素の多機能ぶりをご理解いただければ幸いです。

末筆になりましたが、寄稿いただきました皆さま、記事の再掲載に快く承諾いただきました皆さまに心から感謝申し上げます。
(日本石灰窒素工業会)

農家の石灰窒素使用体験記(今昔)

畑作・野菜経営に石灰窒素の効果を活かす

北海道厚沢部町 齊藤さん

齊藤さんは、厚沢部町当路地区で畑作・野菜を営んでおり、栽培面積は60haと大規模です。キャベツをつくり始めて20年以上になりますが、当初から根こぶ病対策として粒状石灰窒素を使っています。当路地区では、キャベツ生産者4戸全員が石灰窒素を使っているとのこと。

定植作業は5月上旬から7月下旬にかけて行い、安全かつ効果的に使用するために、定植1週間～10日前に石灰窒素(60kg/10a)と炭カルを同時にブロードキャスターで散布します。その後、定植前にロータリーで整地を行い、畦立てした後、基肥として化成肥料N S 604を80～100kg/10a施用します。春・秋は多めに、夏は少なめに施肥することを基本としています。石灰窒素を施用することで、今でも根こぶ病の被害がほとんどみ

られず、生育後半も肥切れせず生育旺盛で、毎年、安定的に平均5t/10aの収量を確保できていることから、齊藤さんは石灰窒素の効果を高く評価しています。

そのほかに、豆類では砂地など地力のない畑で石灰窒素を使っています。施用量は大豆で20kg/10a、小豆で40kg/10aです。窒素が生育後半まで緩効的に効き増収すること、病害虫対策や雑草対策にも効果があることがその理由です。また、スイートコーン畑では低pHの場所に石灰窒素を投入してカルシウムの補給と酸度矯正を行い、正品収量の向上を図っています。

「石灰窒素は、これからわが家の経営には必要不可欠なので、今後も使い続けます」と力強いコメントをいただきました。
(記：江川厚志)

今までもこれからも、長いお付き合いの石灰窒素

茨城県つくば市 相沢さん

私が野菜を栽培している地域は、旧荖崎町でネギの産地です。かなり昔から栽培されていて、どうしても連作になってしまいますので、石灰窒素を使用するようになりました。使い始めてからは30年くらい経ちます。普通の消毒は大変ですし、ネギは肥料を多く使うので、窒素補給も兼ねることができ石灰窒素は、消毒代わりとしては非常に扱いやすく重宝しています。

施用量は基肥として60kg/10a、このほかにロングタイプの肥料も併せて入れています。リン酸との balan

スがどうしても悪くなってしまいますので、そのほかに重焼燐を入れています。ある程度の輪作はしても、どうしてもネギを作付けする回数が多くなりがちですが、30年くらいネギを栽培していても、特に大きな連作障害は出ていないような気がします。品質も安定しています。肥料は、状況に応じて変えることもありますが、石灰窒素だけは、今までもこれからも、当たり前のように使っていくことになると思います。

露地野菜栽培での石灰窒素の活用

千葉県富里市 秋山さん

スイカの産地として有名な千葉県富里市で、長く露地野菜を栽培している秋山さんの石灰窒素の使い方をご紹介します。秋山さんは、キャベツ・ネギ・ニンジン・ナスなどを作付けしており、翌春出荷ネギの追肥作業とニンジンの管理に忙しい最中に訪問しました。雨が続き、貴重な晴れ間となった9月の初め、家族皆さんで作業をしていました。

秋山さんは、石灰窒素を作物残渣のすき込みとして使用しています。1年を通して露地野菜を作付けしているため、収穫後の残渣処理がネックでしたが、「いつまでも圃場にキャベツ残渣があると次作の作付けに影響するので、その対策として石灰窒素が有効です」と秋山さん。以前は、ソルゴーなどの緑肥作物をすき込むときに石灰窒素を使用していました。

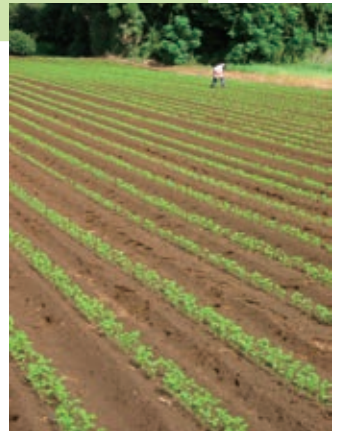
ほかにも、ネギの作付け前に石灰窒素を使用しています。2、3年前にネキリムシの被害が多発し、石灰窒素

が有効との情報から基肥の一部として石灰窒素を施用したそうです。もちろん、苗に対する薬剤処理も怠らず、その結果、被害を軽減することができました。

富里市では、昨今、トウモロコシやニンジンの栽培が増えています。秋山さんのニンジン畑(写真)は、きれいに発芽が揃っていました。

秋山さんは、石灰窒素をライムソーで散布しています。「粒が黒いのが気になりますが、散布には苦勞していません。以前は輸入品を使用したこともありますが、物性が今ひとつでした」との意見をいただきました。

(取材：コープケミカル株式会社 川島、川上)



石灰窒素を活用したキャベツ栽培

大阪府泉佐野市 射手矢さん



射手矢(いてや)さんは、泉佐野市でキャベツ、水稲、タマネギ、サトイモなどを栽培しています。訪問した10月は、水稲の刈り取りとキャベツの作付けが一段落していましたが、サト

イモの収穫に忙しい時期でした。

射手矢さんは、石灰窒素をキャベツの根こぶ病対策として使用しています。根こぶ病に困っていたとき、石灰窒素を使用したところ、「安心して栽培できる」と実感されたそうです。大きなキャベツをつくるのが理想で、

石灰窒素で足りない肥料分は、化成肥料で補っているとのことでした。

石灰窒素を施用した後、定植までに期間を空けるのに苦勞していたとのこと。というのも、キャベツ以外にも作付けしており、奥さんと作業する都合上、いかに効率よく作業できるかを念頭に置いていたからです。しかし、石灰窒素の施用で外葉が大きくなり、雑草の発生を抑えることができ、さらにキャベツ自体も大きく育つのを目の当たりにしたことで、今では石灰窒素を味方にし「こんなに良い物はない」と大変満足していました。

(取材：コープケミカル株式会社 中野、川上)

石灰窒素散布によるノビエ防除

島根県出雲市 岸さん

岸さんはJA職員として永年、営農指導に携わっていました。平成12年にノビエの大量発生に悩まされ、当時の上司に相談したところ、石灰窒素がノビエの休眠覚醒に効果があると聞き、水稲収穫後、10月初旬に2圃場で10a当たり40kgおよび90kgを試験的に散布したところ、11月初旬にノビエの発芽が確認できました。種子の休眠打破が認められ、圃場に落ちていた種籾(稲)の発芽も確認されたとのこと。ノビエの発芽量は40kg圃場が多く、90kg圃場ではノビエ種子が枯死し発芽量が少なかったと推察されました。

石灰窒素散布後、15日間の平均気温は17.2℃でした。岸さんは「ノビエの大量発生はコンバインに巻き付くなど作業に支障を来し困り果てていましたが、石灰窒素を散布した後にノビエの発芽が確認できたときは本当に嬉しかったです」と語っています。

JA退職時に水稲2.5ha、飼料米2.5haであった栽培規模は、休耕田の復活もあり、現在では水稲5ha、飼料米5haまで増えています。「休耕田を再生する計画もあり、石灰窒素の需要が増えると思います」と語る岸さんの今後ますますの活躍をお祈りします。